

# 近江大津宮をめぐる諸問題

Issues Concerning Omi Otsu no Miya

## 吉水眞彦

YOSHIMIZU Masahiko

はじめに

### ①大津宮中枢部復原の問題

### ②周辺寺院の実態

### ③大津宮とその周辺の構造

### ④大津宮の廃絶

おわりに

## 【論文要旨】

天智天皇の近江大津宮は667年、後飛鳥岡本宮から遷都され、5年数ヶ月を経た672年の壬申の乱によって廃都と化した短命の宮都である。7世紀代の宮都で大和以外の地へ宮都が移されたのは前期難波宮と大津宮だけである。その一つである大津宮跡は、現在、琵琶湖南湖南西岸の滋賀県大津市錦織に所在することが判明している。

大津宮の実像を知るために宮の構造や白鳳寺院の実態、周辺の空間構造を発掘調査で確認された遺構や出土遺物である第一次資料を再評価することと新たな発掘資料も加えて検討した。その結果、大津宮の特殊性が見えてきた。すなわち、対高句麗外交や軍事上の拠点整備を推進するために陸上・湖上交通の整備に重心が置かれ、大津宮の形が短期間のうちに推進されていた点である。

大津宮遷都前夜までの比叡山東麓地域は、渡来系氏族の大壁建物や掘立柱建物の集落が営まれ、また各氏族による穴太廃寺や南滋賀廃寺などの仏教寺院も建立されており、周辺には萌芽的な港湾施設も存在していたものと推定される。このように遷都を受け入れる環境が一定程度整備されていた地域に大津宮は移されたのである。そして遷都の翌年、錦織の内裏地区の北西方の滋賀里に周辺寺院の中では眺望の利く最も高所に崇福寺を新たに造営し、対照的に宮の東南方向の寺院の最低地に当たる現在の大津市中央三丁目付近の琵琶湖岸にはほぼ同時期に大津廃寺を建立した。つまり崇福寺跡と大津廃寺は川原寺同範軒丸瓦を共通して使用していることから、大津宮と密接な関係がみられ、前者には城郭的要素があり、後者には木津川沿いの高麗寺と「相楽館」のような関係を有する港湾施設を近隣に配置し、人と物の移動のための機動力を重視して造営された。これらに触発されたかのように周辺氏族は穴太廃寺の再建例にみられるように再整備を行なっている。このように大津宮の内裏地区や、大津廃寺を除いた仏教寺院は高燥の地に立地し、かつ正南北方位を意識した配置がみられるのに対して、木簡などを出土した南滋賀遺跡の集落跡などは低地に営まれ、かつ正南北方位を意識しない建物を構築している。おそらく内裏地区や白鳳寺院、諸機能を分担した各施設は整齊に計画され、その周辺には地形に左右された集落などが混在した空間を呈していたものと思われる。

近江朝廷の内裏や寺院・関係施設などを短期間に新設し、ハード面を充実させていくにつれて渡来系集落的景観から大津宮の交通整備重視の未集住な空間へと変遷していったものと考えた。

【キーワード】 近江大津宮、崇福寺跡、大津廃寺、港湾施設、陸上・湖上交通の要衝

## はじめに

近江に営まれた宮都は、成務天皇の高穴穂宮（『古事記』に記載、『日本書紀』では景行天皇と記載）、天智天皇の近江大津宮、聖武天皇の紫香楽宮、淳仁天皇の保良宮の4箇所があり、滋賀県甲賀市に所在する紫香楽宮跡以外は大津市に位置する。また実態が不詳である高穴穂宮を除いた三つの宮は、いずれも短命であったようである。それらのうち、発掘調査等で宮殿遺構の一部が確認されているのは近江大津宮（以下、「大津宮」と略称）と紫香楽宮だけである。紫香楽宮跡は計画的かつ継続的に発掘調査がなされているせいか、その規模や構造等の研究成果にめざましいものがみられる。それに対して本稿で取り上げる近江大津宮は、1974（昭和49）年に大津市錦織地区において内裏南門遺構が発見されたものの、その当時と同じく遺跡が住宅密集地に位置すること、さらには最近の埋蔵文化財の保護方針とも関わることなどから、断続的な発掘調査となっており、しかも小規模なものが目立っている。最後に宮殿遺構が確認されたのは2003（平成15）年度のことである。また考古学的調査同様、近年の宅地開発等土木工事による地形の改変は歴史地理学的方法においても、その研究に支障をきたしている。文献史学においても大津宮関係記事はあまりにも少なく、今後木簡資料等の文字資料の出土も期待度は低いものと思われる。したがって、このような現状においては大津宮研究の進展性や深化が遅々としているのも当然であるかのような状況となっている。

一方、大津宮と比較検討されることが多い飛鳥諸宮や前期難波宮における調査や研究は著しく進展している。宮中枢部における各種宮殿建物の構造と配置状況や宮周辺地域の構造までも論議されている。とくに飛鳥における大津宮遷都直前の斉明天皇の後飛鳥岡本宮や同遷都後の天武天皇の飛鳥浄御原宮の調査研究が深化するとともに大津宮の中枢部と比較されることが可能となり、その形態が前期難波宮との比較論〔林2001〕よりも後飛鳥岡本宮や飛鳥浄御原宮のそれに類似する見解が有力となりつつある〔林部1998〕。しかし、大津宮に関しては先述したとおり今後も当該地における考古学的調査による成果はあまり期待できないようであり、各々の宮都との比較研究にもきわめて困難な状況が想定される。

そこで本稿では現時点における大津宮研究の現状を把握し、そこから見出された課題を整理することを目的とし、大津宮中枢部の復原案や周辺寺院の実態、宮とその周辺の構造などの諸問題について、資料は限られているが若干検討してみたい。

### ①……………大津宮中枢部復原の問題

中大兄皇子は、667（天智天皇6）年、後飛鳥岡本宮から近江大津に宮を遷し、翌年ここで即位した。天智天皇である。その後およそ5年数ヶ月を経た672年、壬申の乱によって大津宮を本拠とする大友皇子側が大海人皇子側に敗れたことにより廃都と化した。宮は再び飛鳥に移されたのである。この間、大津宮には史料から次のような施設が存在したようである。内裏・濱臺・大蔵・宮門・朝廷・殿・漏刻・新しき臺・小殿・臥内・内裏の仏殿・内裏の西殿・大蔵省の第三倉・新宮・大炊・大殿のことである。これらは『日本書紀』天智天皇7年から同10年・天武即位前紀までの記事にみ

られるが、他にも『懐風藻』には「庠序」が、『藤氏家伝』には「濱樓」「私第」「淡海之第」などが記されている。以上のような施設は大津宮の構造を知るうえでの具体的なものを表しているものと思われるが、現時点においてはそれらの施設と一致する具体的な遺構はほとんど確認するにはいたっていない。

そのようななかで1974(昭和49)年、大津市錦織地区における滋賀県教育委員会の発掘調査によって巨大柱穴をもつ建物遺構がはじめて発見された〔滋賀県教育委員会1992〕(図1)。のちにこの遺構は内裏南門遺構とみなされ(図2)、さらにこの遺構の東側に取り付く回廊(のちに複廊と判明)や南北方向の掘立柱1本柱列(板塀跡)(図3)、内裏正殿(図4)・庇付建物(図5)・長殿などが次々と確認

されるにいった。林博通氏は、これらの遺構群を「内裏」の一部ではないかとみなし、さらに大津市教育委員会が実施した発掘調査により見つかった東西2間、南北2間以上の建物も内裏に南接する朝堂院の西第一堂と推定し、周辺の微地形も加味して大津宮は内裏とその南の朝堂院が配置されるという宮の中枢部を推定復原した(図6)。氏の見解によると、「大津宮の構造は前期難波宮に近い構造をとっていることがうかがわれ、前期難波宮をやや変形・縮小したもの」と理解されている〔林1984, p.130〕。また従来、大津宮の所在地については琵琶湖南湖の西岸から南岸に沿って北から南に向って穴太・滋賀里・南滋賀・錦織・大津市街地・栗津などの諸説が提唱されていたが(図7)、錦織地区の宮殿遺構等の確認によって、滋賀県教育委員会は「錦織説」をもってその位置を断定したのである。そののち点在するこれらの遺構群については、近江大津宮錦織遺跡として国史跡に指定され保存が図られ現在にいたっている。

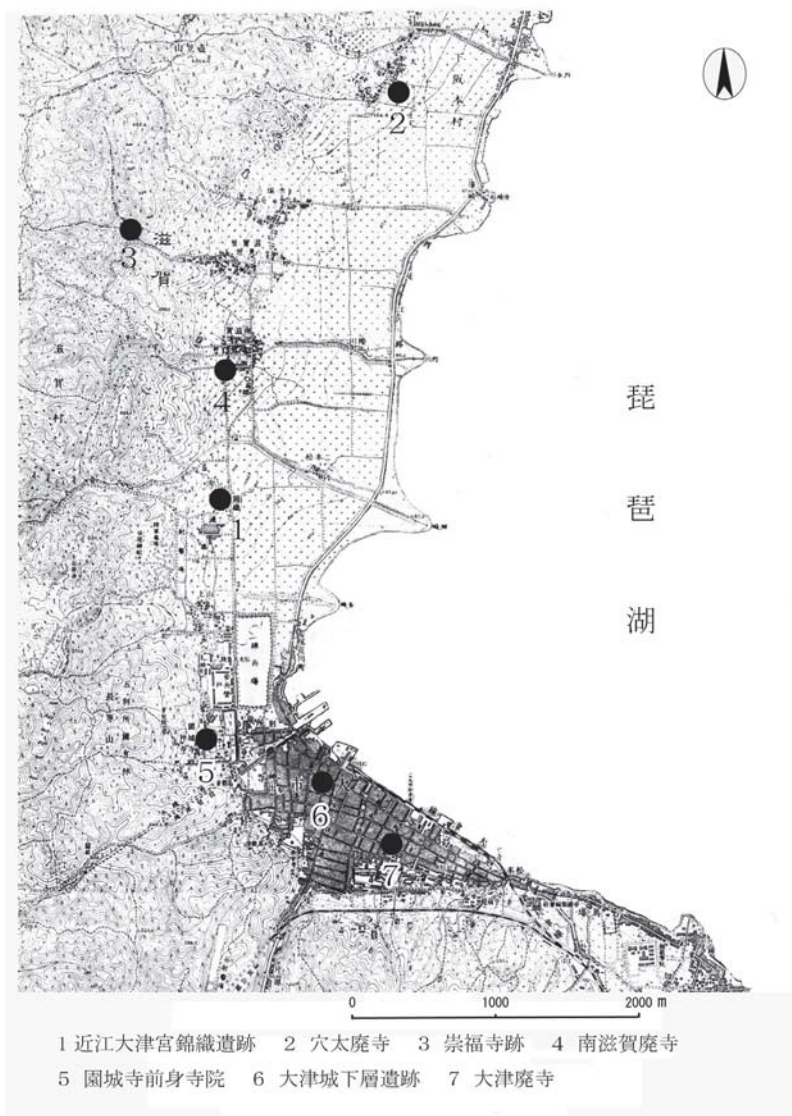


図1 近江大津宮錦織遺跡と周辺遺跡分布図

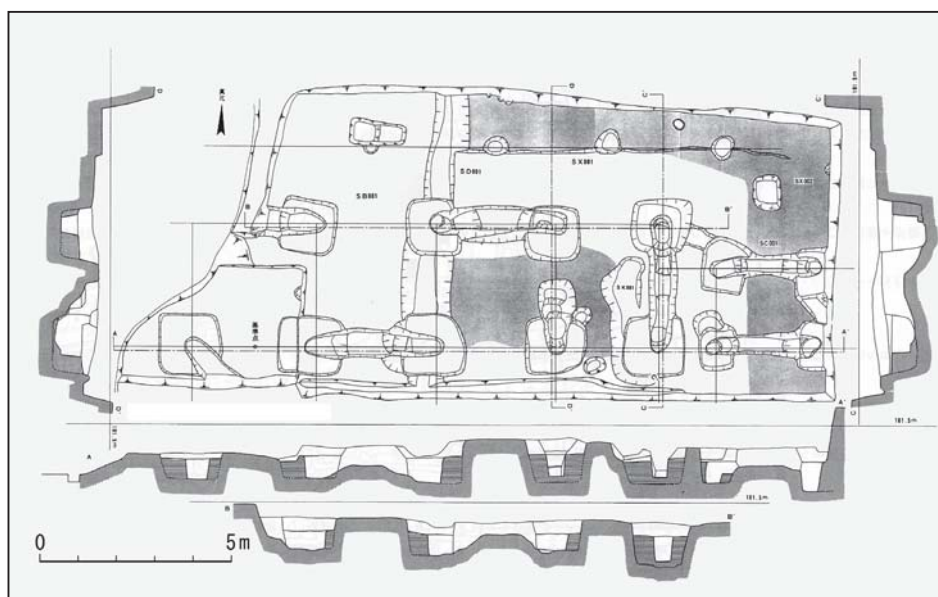


図2 南門遺構図

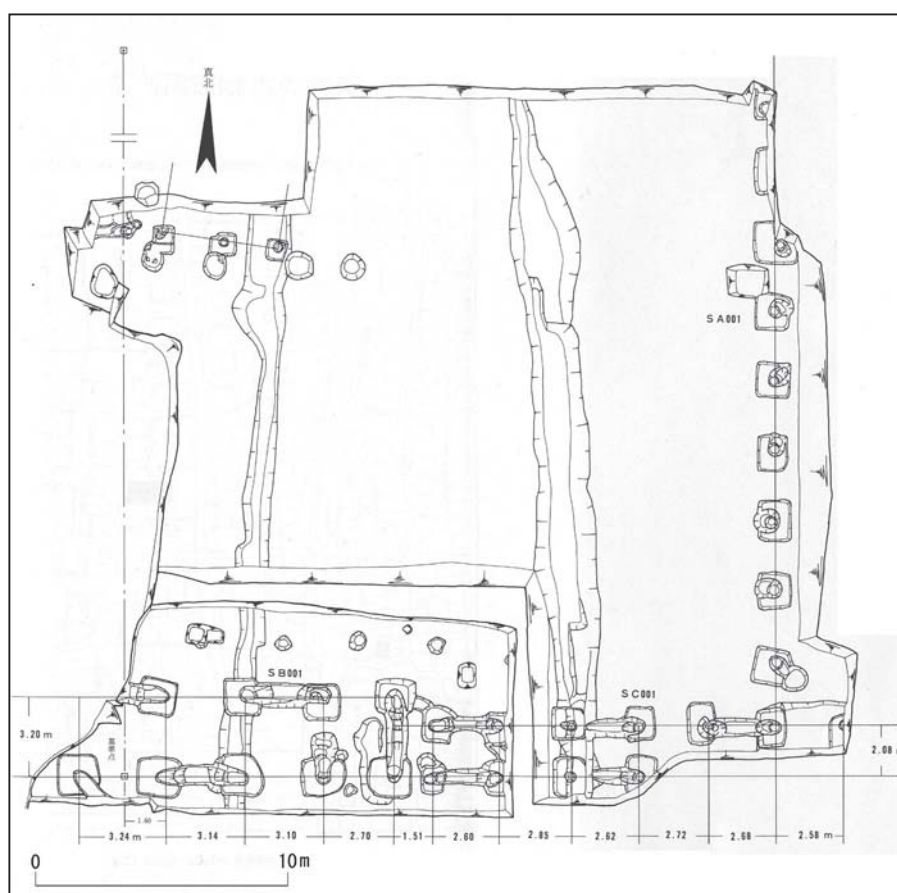


図3 南門・回廊・塀遺構図



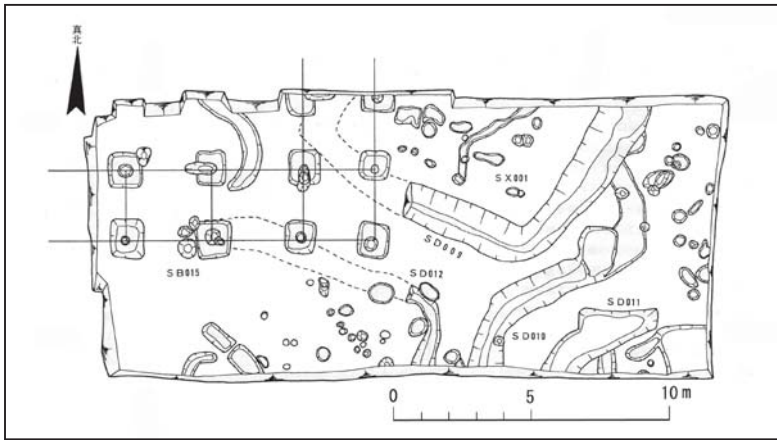


図4 内裏正殿遺構図

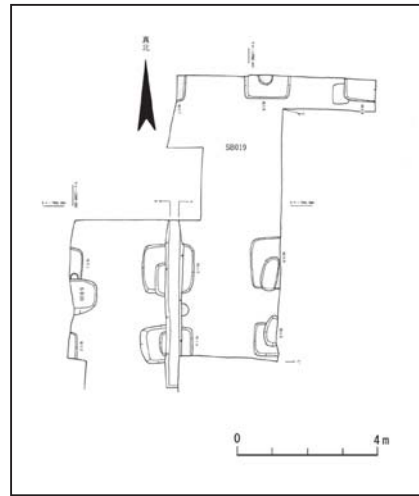


図5 庇付建物遺構図

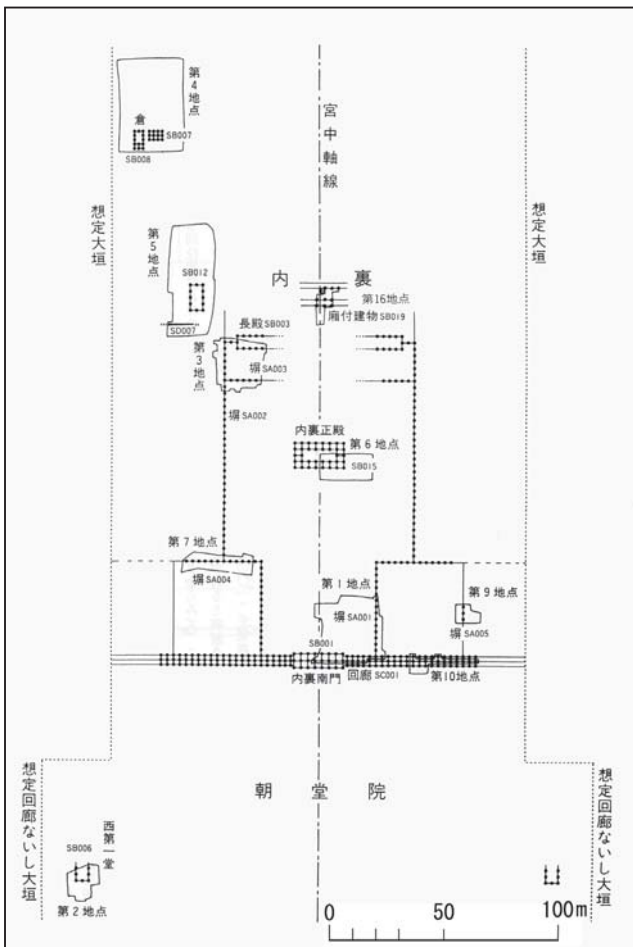
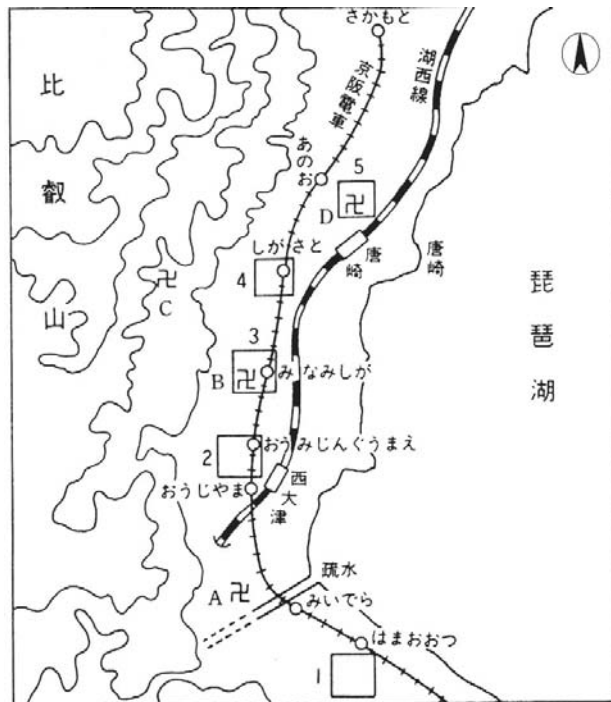


図6 大津宮中枢部推定復原図



- 1 大津市街地説 2 御所ノ内説 3 南滋賀説  
 4 滋賀里説 5 穴太説 A 園城寺前身寺院  
 B 南滋賀廃寺 C 崇福寺跡 D 穴太廃寺

図7 大津宮所在地諸説位置図

さて、これに対して飛鳥地域では伝承飛鳥板蓋宮跡の発掘調査成果により、相違する設計をもつ3時期の遺構群が重複して遺存していることが判明している。小澤毅氏は、第I期を舒明天皇の飛鳥岡本宮に、第II期を皇極・斉明天皇の飛鳥板蓋宮に、最上層にあたる第III期の新旧2時期のA・B遺構群を、それぞれ斉明天皇の後飛鳥岡本宮と天武天皇の飛鳥浄御原宮に比定している〔小澤2003〕。後飛鳥岡本宮（Ⅲ-A期遺構群）は、約300m四方の規模をもち、内郭と外郭から構成されており、内郭は北側の天皇の私的空間と南側の公的空間に分かれており、エビノコ郭以北の官衙地区にあたる外郭からなっている（図8）。飛鳥浄御原宮（Ⅲ-B期遺構群）は、後飛鳥岡本宮の南方に公的儀礼空間と推定されるエビノコ郭を付け加えたもので、東西100～450m、南北720mの規模を持つ。これらの遺構群をもとに大津宮と比較検討した林部均氏は、「近江大津宮は形態的に飛鳥Ⅲ-A期の内郭と共通しており、それを少し小さくした王宮であり、同じ段階の王宮である」とみなしており、かつ「現在、大津宮で判明している内裏南門の規模は、前期難波宮の三分の一と小規模であることから、とても共通しているとは言いがたい」と主張する〔林部2008, pp.109-117〕。

以上のように、議論が展開している大津宮中枢部の推定復原であるが、林氏と林部氏の主張する説が異なったものにいたった理由は、考古学的調査において宮関係遺構が検出されるはずの地点で遺構が確認されているか否か——例えば朝堂西第三堂に当たる場所での遺構や南門のすぐ北側での正殿遺構の未検出など——にあり、それが多分に影響しているようである。とくに朝堂西第一堂の遺構も含めて朝堂院存否の問題はきわめて重要である。

まず大津宮中枢部にあたる大津市錦織から皇子が丘地区までの地形についてみてみたい（図9）。

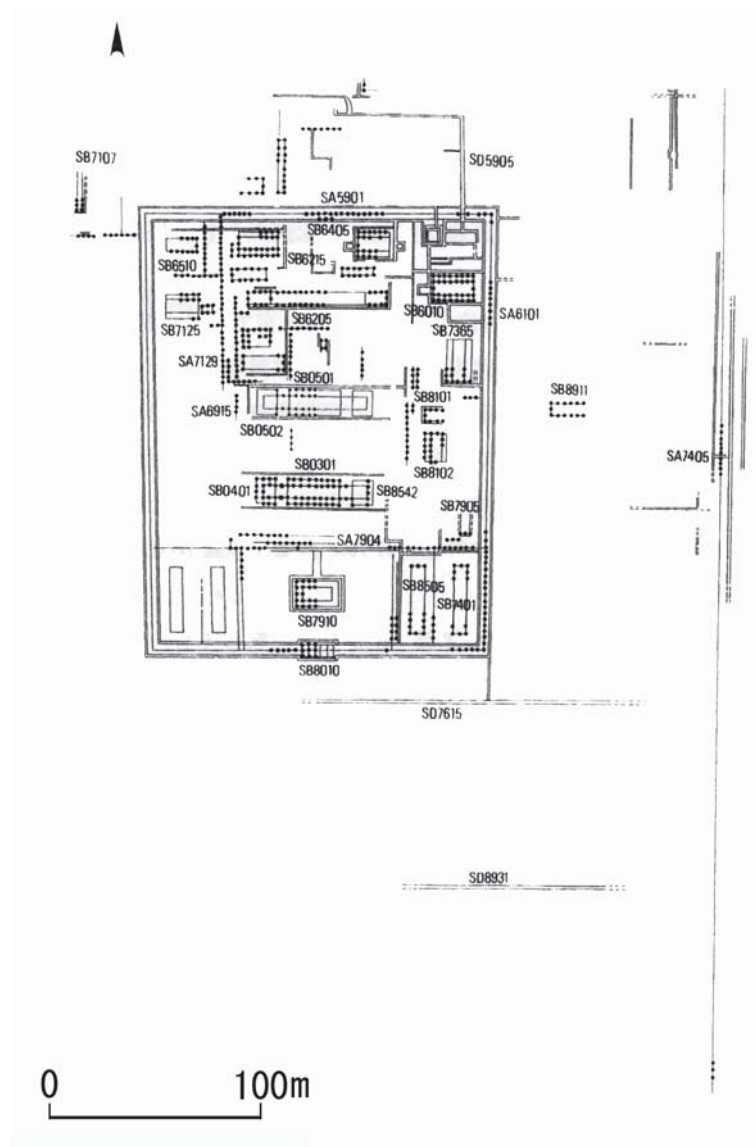


図8 飛鳥宮Ⅲ-A期遺構図





図9 錦織の地形図および大津宮推定中枢部

地元の古老によると、昭和初期の京阪電車敷設頃までの地形は、柳川付近から南方の不動川に向かって現況よりもかなり急傾斜していたようである。「志賀皇宮址」石碑前の南北道路（現在の県道伊香立一浜大津線）は、かつて「志賀道」（しがみち）と呼ばれ、元々石碑の基底ぐらいの高さまであった。旧道（南北道路）の西側（山側）には北から南に向かって小川（水路）が流れ、谷間のように急傾斜する皇子が丘地区の棚田への灌漑用水路としても利用されていたようである。そしてこの小道を拡張し、現在の道路幅の約半分程度の農道が西側に造られたようである。さらに京阪電車建設工事に当たっては農道建設の際に削平したその排土を谷間の低地部分を埋め立てるための盛り土として利用したとのことである。すなわち、かつて急傾斜面であった一帯に想定されているのが「推定朝堂院地区」である。

ちなみに「推定内裏地区」の西側に「想定大垣」と復原されるラインよりも一段高い西方の丘陵地は棚田として開墾されていた。現在、クスノキの大木が1本生えている「通称代官屋敷」と呼ばれている明治30年頃に滋賀県令から貴族院議員となった籠手田安定旧宅付近だけが他の地点よりも一段高い丘の上の場所として目立っていたようである。またこの「通称代官屋敷」の東側の一段低い側には人家が密集し、水田や畑地として利用されていた。現在、この間に南北にみられる段差の状況は、当時の地形の印象としてはあまり語られていないのが実情である。このように明治から昭和初期にかけての地形の改変を経て、現在の地形が形成されていることを知る事ができたが、このことから現地地形の残存状況をもとに「想定大垣」の復原を試みることは慎重にすべきであろう。

さて錦織や皇子が丘地区の発掘調査による成果としては、古墳時代以前の竪穴住居や溝などの遺構・遺物や、奈良・平安時代以降の掘立柱建物や寺院関係遺構および瓦類などの出土遺物は顕著に認められる。しかし大津宮時代の宮殿遺構は極めて希薄な検出状況である。細川修平氏は、大津宮中枢部の遺構について、「大津宮前後の飛鳥地域の宮と比較して建物等の遺構密度が低い点に特徴がある」と指摘されている〔細川2011, p.146〕。それについて筆者も同意見であり、①大津宮は急ごしらえの宮であること、②宮の存続が短期間であったこと、③地形的制約によること、④後世の遺構の削平による影響によることなどを考えている。いずれにしてもこれらの地区における多数の調査によって大津宮期以外の遺構は濃密に検出されていることを考慮すると、細川氏の指摘のように「遺構密度が低いもの」と理解した方がよさそうである。筆者は大津宮期の遺構が元々希薄であったと理解することによって大津宮関係施設は元々密集するほど構築されていなかったのではないかと考えている。仁藤敦史氏も「大津宮はまだ『京』を付属させない都城制以前に位置づけられる過渡的な宮で宮城の広大な領域性・多元性・分散性を特色とする」と述べているように〔仁藤1998, p.195〕、錦織・皇子が丘地区以外の他地域にも分散配置されていたと理解するのが妥当であるといえよう。先述したように、とくに「推定朝堂院地区」では「朝堂西第一堂」遺構だけが検出されている状況である（図10）。これについては、筆者は前稿で、「朝堂西第一堂」の遺構について検討したことがある〔吉水2011A〕。ここでは詳しく紹介する余裕はないが、掘立柱建物SB006から出土した須恵器長頸壺は、口頸部外面に沈線が認められないことや、掘立柱建物の存続期間を考慮すると、この遺構は奈良時代の8世紀中葉頃のもののみなされる。またSD004についてもSB006の雨落溝であるという機能は果たしていないものと判断できることから、現時点では「朝堂西第一堂」の遺構の存在を否定したものである。



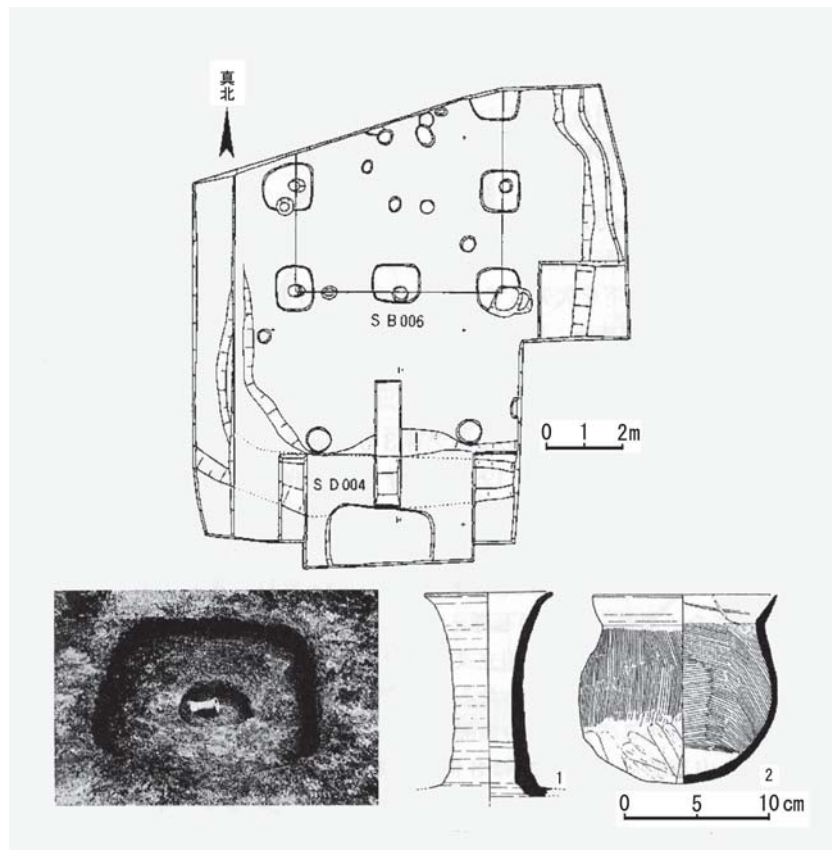


図10 推定朝堂西第一堂と出土遺物

また宮殿建物の標高差を比較してみると、朝堂西第一堂が102.6 m、南門や回廊が101.5 m、内裏正殿が102.7 m、庇付建物が105.0 mを測り、もちろん遺構面残存の深さや厚みの状況にもよるが、朝堂西第一堂は庇付建物を見上げる位置にあり問題はないが、内裏正殿や南門・回廊遺構については、ほぼ同じ高さにあたっているか、もしくは見下ろす位置にあたっていることから、宮殿の立地条件にはそぐわない関係がみられる。この点からも朝堂の位置の存在を否定することができよう。とすると、他の施設の存在——とくに飛鳥浄御原宮のエビノコ郭のような施設が想定されるものの、西高東低の立地条件や現在までの発掘成果を考慮すると、この内裏南門以南の皇子が丘地区で道路や港湾の施設遺構を除いた重要施設を想定することはきわめて困難な状況であるといえよう。

以上のことから、大津宮中枢部で検出された遺構の配置状況は林部氏の見解による「王宮中枢は内裏南門から北の空間に展開していたとする飛鳥Ⅲ-A期遺構群（後飛鳥岡本宮）が前期難波宮よりも有力である」といえる〔林部2008, p. 112〕。しかし規模においては全体的形状や個々の宮殿建物について大津宮が最も小規模であること、また構造においても大津宮や前期難波宮では南門から東西に延びる複廊が取り付くが後飛鳥岡本宮では複廊ではないこと、また近年では黒崎直氏は栃木県西下谷田遺跡の「地中梁を使用した」建物を検討し（図11・12・13）、大津宮の南門も地中梁を設けた五間門に復原されていること〔黒崎2001〕など、従来の見解とは異なる意見も提出されている。

以上のように大津宮中枢部は前期難波宮や飛鳥Ⅲ-A期遺構群（後飛鳥岡本宮）の両宮都のうち、いずれか一方に確実に一致するものではないといえよう。

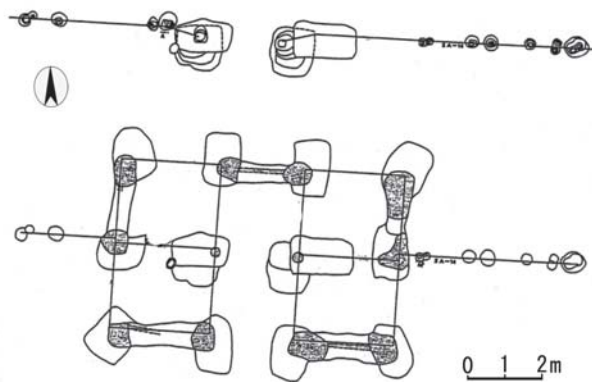


図11 西下谷田遺跡遺構図

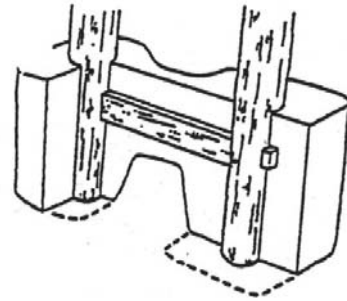


図12 地中梁推定復原図

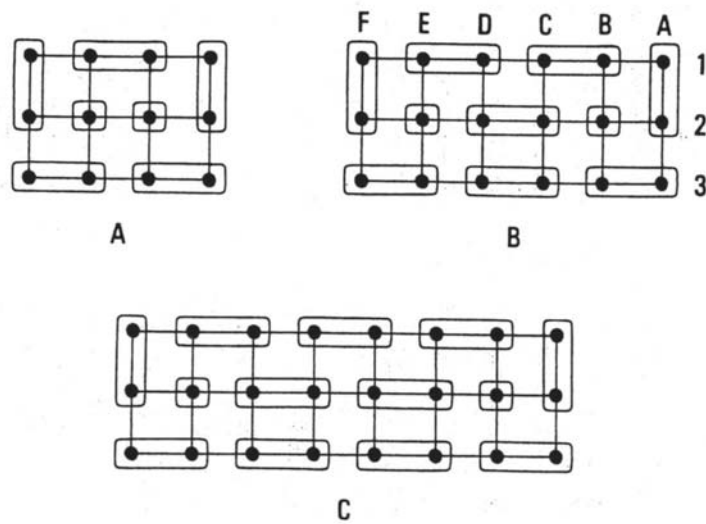


図13 布振り掘形の配置模式図遺物推定中枢部  
(A: 正面三間例 B: 五間例 C: 七間例)

## ②……………周辺寺院の実態

近江大津宮の規模や構造を知るためには、上述したような錦織遺跡に限った遺構の解釈だけでは理解することは困難であり、それ以外の地区の関係遺構も含めて考察することが必要である。とくに『日本書紀』の「内裏の仏殿」や「崇福寺建立説話」が示すように大津宮周辺の古代寺院にも焦点をあてて評価することは重要であろう。

大津宮周辺の白鳳寺院については、林氏によって「大津宮を中心に北に穴太廃寺、崇福寺、南滋賀廃寺、南に園城寺前身寺院がそれぞれ宮を取り囲むように配置され、宮を防備するために造営さ

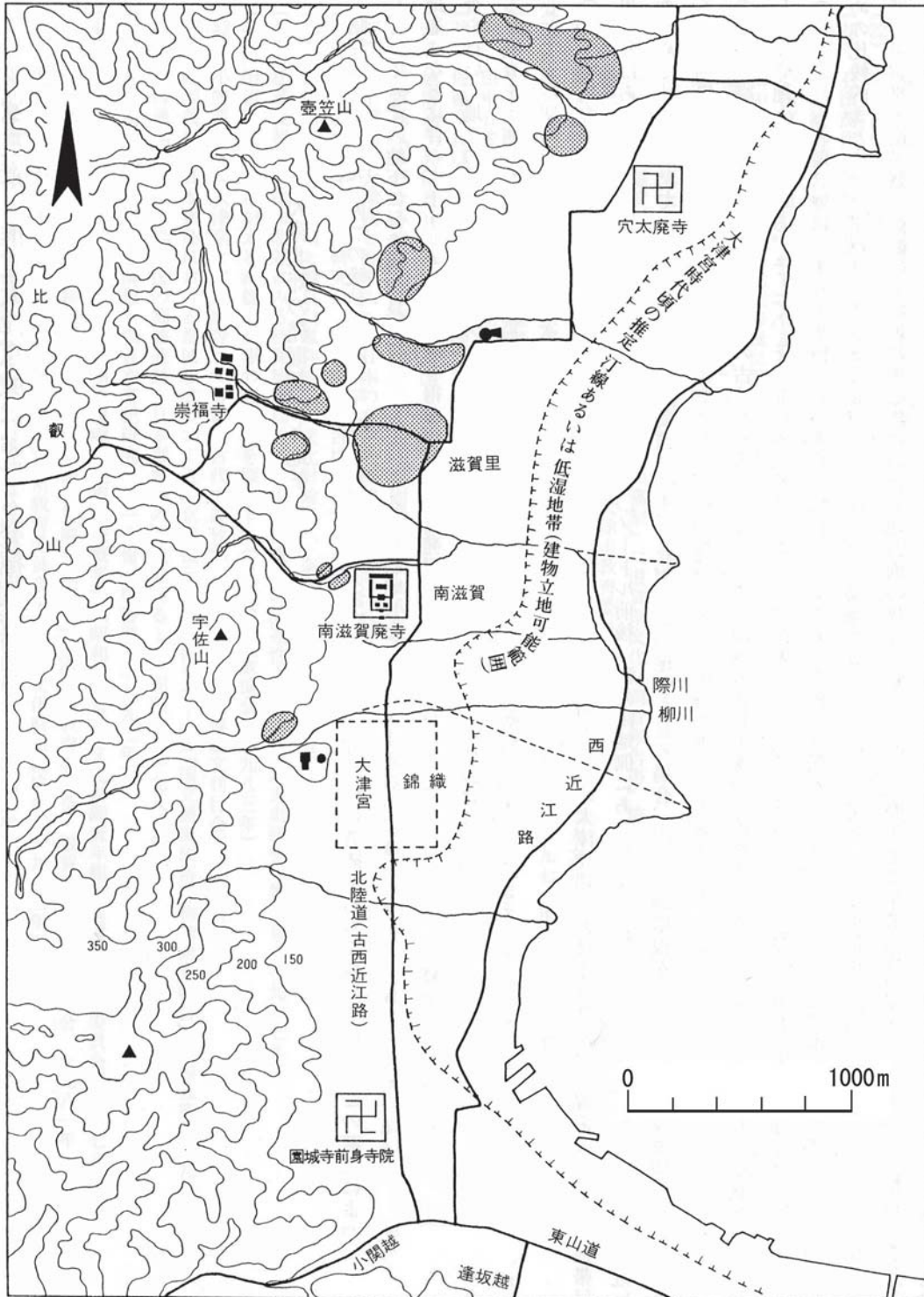


図14 大津宮の周辺の地勢図



れたもの」とする(図14)[林1978, pp.136-140, 林1984, p.141]。この見解によると、天智天皇の崇福寺はともかく、他の3寺院の位置と方位の関係、方形瓦が出土することを共通事項として取り扱われることが理由のようである。しかし大津市内には他にも白鳳期の坂本八条遺跡(廃寺)や膳所廃寺などの白鳳寺院も存在する。とりわけ近年、発掘調査で確認された大津廃寺は川原寺式同範軒丸瓦が出土した寺院として注目される(図15・16・17)。また戦前に大津宮探索のために崇福寺と同様に発掘調査された南滋賀廃寺は、大津宮北方の近距離に位置し中軸線が近似した方位をもつことが重視され、宮との密接な関係を主張する論考が多くみられる。その際に取り扱われる資料が川原寺式同範軒丸瓦である。

以下、川原寺式同範軒丸瓦が出土あるいは採集されたとする大津廃寺と南滋賀廃寺・崇福寺跡について述べてみたい。

大津廃寺は大津市中央三丁目に所在し、JR大津駅の北東方約400mに位置する[田中2009]。標高約90m付近にあり、現在の琵琶湖の水位約84.371mと比べて約6mの差がある。1999・2000年



図15 大津廃寺位置図(1)



図16 大津廃寺位置図(2)

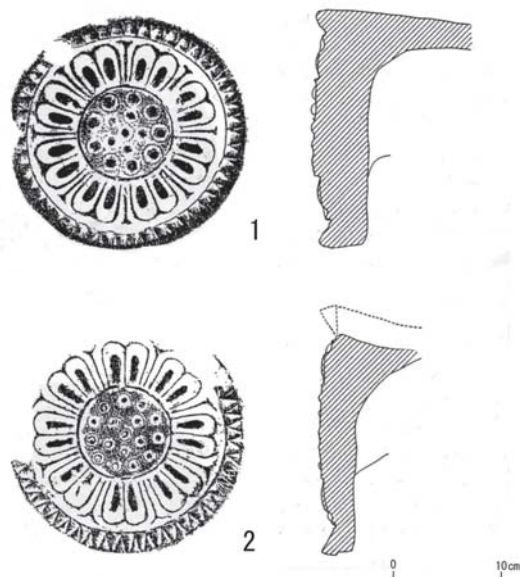


図17 大津廃寺出土軒丸瓦

度の調査において東西方向や南北方向の溝跡や土坑とともに白鳳期から平安時代にかけての瓦類が出土した。軒丸瓦には、複弁八弁蓮華文・単弁十弁蓮華文・蕨手文があり、軒平瓦には四重弧文・三重弧文・偏行唐草文・均整唐草文・飛雲文等がある。そのうち複弁八弁蓮華文には2種類あり、大和川原寺出土601A種同範瓦(図17-1)と草津市宝光寺出土同範瓦(図17-2)がある。前者は5点出土しており、瓦当直径19.0 cm、中房径7.4 cm、弁区幅3.7 cm、外縁幅1.8 cm、厚さ3.7 cmを測る。中房には周環をもつ蓮子を1 + 5 + 9に配し、中房と外縁は凸線で区画する。弁は肉厚で、間弁と蓮弁とはほぼ同じ長さである。外縁には鋸歯文の右側に段を持つ面違鋸歯文がみられる。瓦当側面にはヘラケズリがみられ、瓦範の痕跡が認めることができる。瓦当と丸瓦の接合部は明らかではないものの、補強粘土は凸面よりも凹面に多く用いており、裏面にはナデを施す。文様の稜線は丸みを帯びており総体的にシャープさに欠ける。宝光寺タイプよりも古いタイプと思われる。後者は18点出土しており瓦当直径18.9 cmを測る。それぞれの寸法は前者と類似する。中房には周環をもつ蓮子を1 + 5 + 11に配する。間弁は蓮弁よりやや長く、先端は両側の蓮弁を覆うようになる。前者に比べると肉厚でないものの総体的にシャープさがみられる。

さて、このような特徴をもつ前者の大和川原寺式同範軒丸瓦を使用した大津廃寺は、遺構はそれほど多く確認されていないものの、年代的には大津宮の時期に建立されたものと考えてほぼ誤りはないであろう。また軒丸瓦の同範関係から南山城高麗寺や天智天皇勅願寺院である崇福寺との関係も注目される。大津廃寺は現在の浜大津から打出浜間の山側(南側)に位置し、後世、京都山科から小関越や逢坂越(大関越とも呼称される)で峠を越えた大津側の交差点(後の浜大津札の辻付近)で分岐して北へ向かう北陸道と、東へ向かう東海・東山道(京町通り)が通過しているが、その東海・東山道を若干進んだところに位置している(図14)。また平安時代の和歌や日記に記された「石山寺参詣」の際に頻繁に利用されたとする「打出浜」の港がこの付近に推定されている。以上の



ように、大津廃寺は陸上交通の要衝と琵琶湖の湖上交通の拠点に造営されたものとみなすことができる。またこの寺院の性格として山城の木津川畔の「相楽館」の隣接地に高麗寺が造営されたように、この寺院の付近にも志賀津など港湾関連施設が設けられ、両者は一体化と機能分担の両面から整備された可能性がある。

つぎに南滋賀廃寺(図18)と崇福寺跡から出土あるいは採集されたとする大和川原寺出土601A種同範軒丸瓦について、果たして第一次資料として取り扱うことが適切かどうかを検討してみたい。この軒丸瓦を川原寺出土品と同範であることを明らかにしたのは金子裕之氏である。氏の見解によると、「最初に川原寺の範があり、それが高麗寺へ移動する。そして最終的に、崇福寺のようにより範傷の進行したものが近江に移動する」というものであった[金子1983, pp.269-285]。

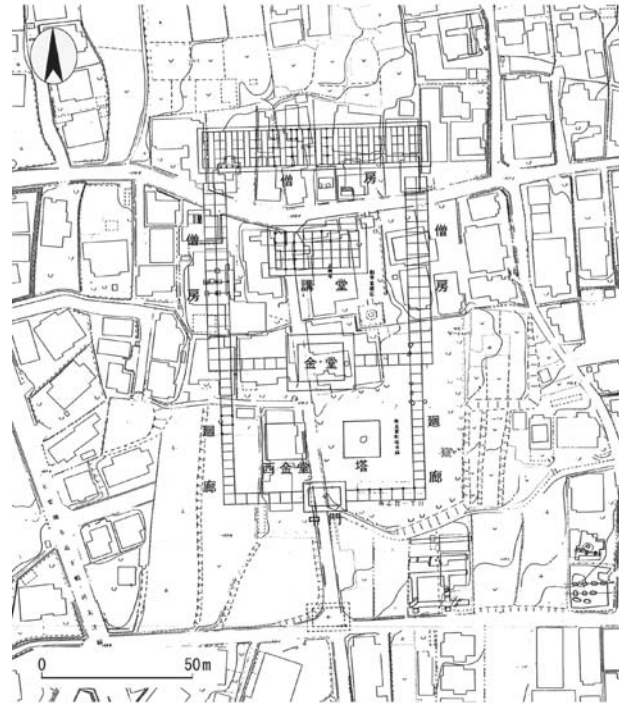


図18 南滋賀廃寺主要伽藍配置図

さて、天智天皇勅願寺院である崇福寺はともかく南滋賀廃寺はこの資料をもとにこの周辺の白鳳寺院との比較論や大津宮との密接な関わりを重視した論考が多くみられるが、このような契機を与えたのは西田弘氏による「いずれにしても両地(崇福寺跡と南滋賀廃寺のことか)から出土していることは確実であろう」との理解によったものであろう[西田1980, p.52]。

まず柴田實氏が1940年に報告された「大津京趾(上)南滋賀の遺蹟とその遺物」(以下、「柴田1940年報文」と略称)の「図版第三九南滋賀出土古瓦——複弁系」中の3番の複弁八弁蓮華文軒丸瓦を塚本権右衛門氏所蔵として紹介されている資料があるが(図19)[柴田1940]、この資料は1975年、滋賀県教育委員会発刊の『檀木原遺跡発掘調査報告書—南滋賀廃寺瓦窯』(以下、「滋賀県教育委員会1975年報文」と略称)の「図版53周辺遺跡出土遺物」中の最上段掲載143番の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と同一資料とみることができ[滋賀県教育委員会1975]、現在、滋賀県立琵琶湖文化館に保管されているものである(図20)。この資料の瓦当裏面には「崇福寺丸山出」と縦書き2行で墨書されており、「滋賀県教育委員会1975年報文」の「図版53周辺遺跡出土遺物」の中段に掲載されている144番の輻線文複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当裏面にも「崇福寺丸山出」と同様の筆致で縦書き2行に墨書されているものがあるが(図21)、これらの記載は塚本権右衛門氏所蔵のほかの資料にも同様の筆致で記載されているものが存在することから塚本氏自筆の可能性が高いものと推定される<sup>(2)</sup>。とすると、柴田1940年報文の図版第三九の3番の軒丸瓦は南滋賀から出土あるいは採集されたものとみることは否定される。また柴田氏が1941年に報告された「大津京趾(下)崇福寺趾」(以



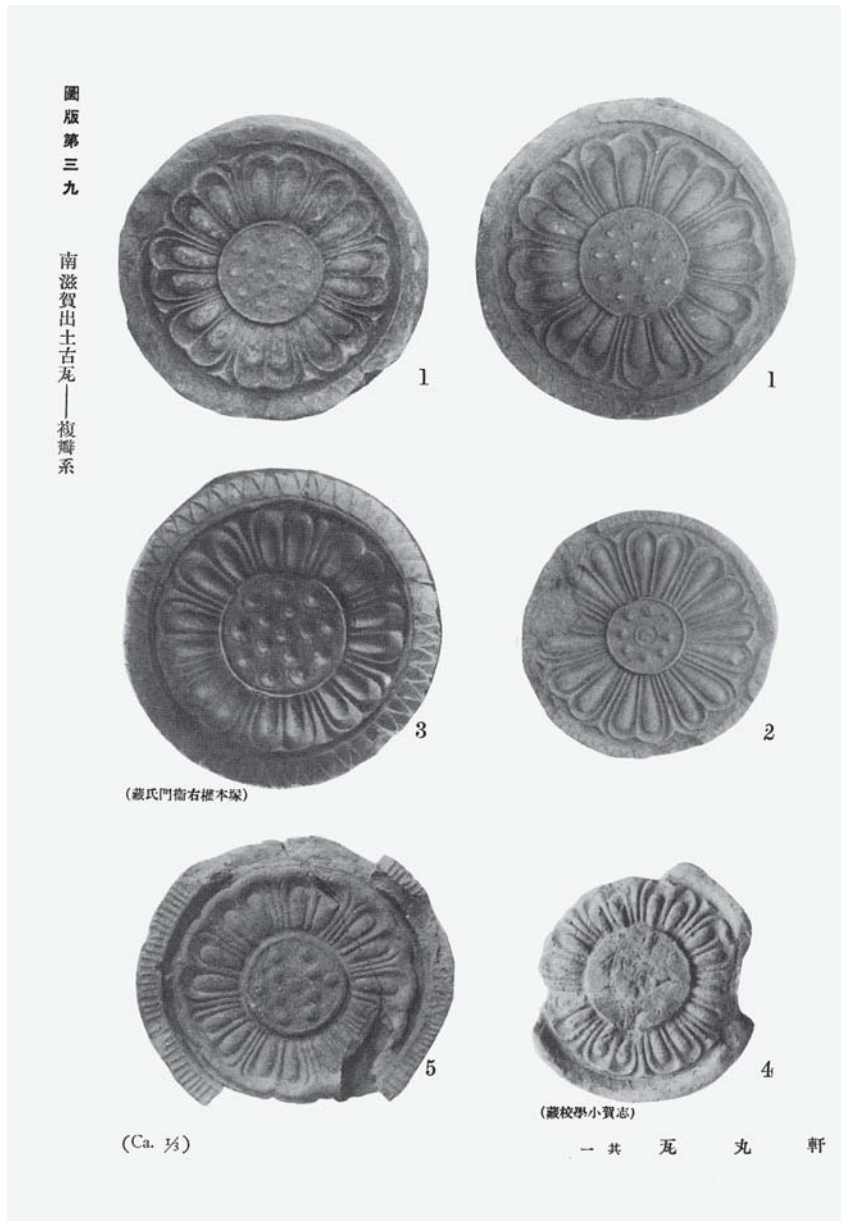


图19 图版三九 南滋賀廢寺出土古瓦一複弁系

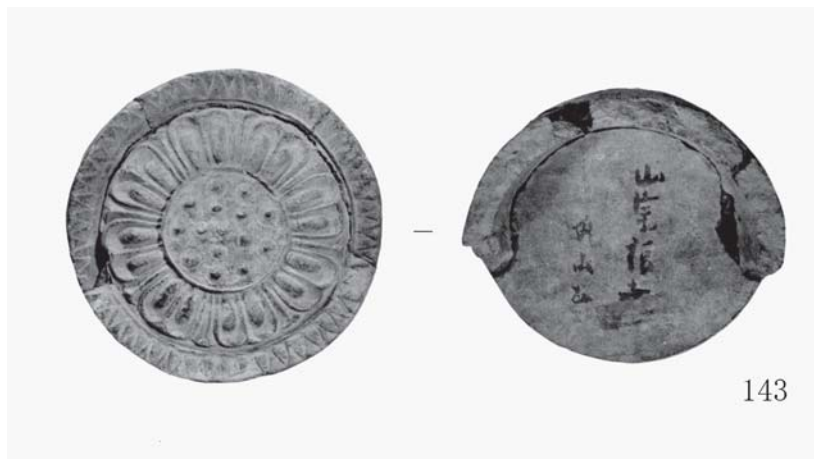
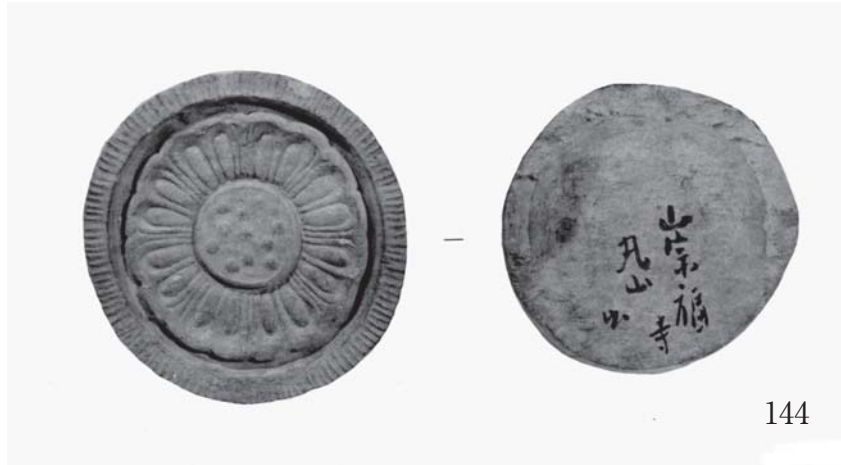


图20 崇福寺跡復弁蓮華文軒丸瓦



144

図21 崇福寺跡輻線文軒丸瓦



図22 図版六七 崇福寺趾出土古瓦



図23 伝南滋賀廃寺採集軒丸瓦

下、「柴田 1941 報文」と略称)の「図版第六七崇福寺趾出土古瓦」中の1番の複弁八弁蓮華文軒丸瓦にも塚本権右衛門氏所蔵として紹介されている資料があるが(図22)[柴田 1941], 写真と実測図が異なっており, 詳細は不明なものの崇福寺跡からはこの同範軒丸瓦は存在したものと理解してよいのであろう。さらに先述したように「崇福寺丸山出」と墨書された複弁八弁蓮華文軒丸瓦は大和川原寺出土 601A 種同範軒丸瓦とみなされ, 崇福寺跡からは確実に出土・採集されたものと理解することができる。「丸山」という地名は, 現在中尾根に小字名として残存しており, 戦前の発掘調査で確認された中尾根の塔跡や金堂跡が立地する地点と一致することからこの中尾根の遺構付近から採集された資料とみなされるのである。

さて, 南滋賀からは他にもわずかに1点だけ川原寺出土 601A 種同範軒丸瓦が発掘品ではなく採集された資料として伝承されているものが存在する<sup>(2)</sup>。この資料は、「滋賀県教育委員会 1975 年報文」の「図版 45 周辺遺跡出土遺物」の最上段に掲載されている 113 番の軒丸瓦のことである(図 23)。この軒丸瓦は, 瓦当の上部すなわち面違鋸歯文を有する外縁の一部を欠失しているものの, それ以外の保存状態は良好である。採集された経緯は不詳であるが, 現在, 近江神宮所蔵, 大津市歴史博物館寄託品となっているものがそれである。この軒丸瓦の瓦当裏面には, 縦書き三行で右から左へ「昭和十五年 白子善一氏 南滋賀出土」と墨書されている。これだけの情報をもとに読み解くと, 昭和 15 年(1940), 滋賀里在住の白子善一氏が南滋賀の某所で採集もしくは入手したのち, いつかの時期に近江神宮へ移されて所蔵品となり, その後大津市歴史博物館へ寄託されたものとみなされる。このいつかの時期については不明であるが, すぐに近江神宮へ届けられたものとする, 紀元 2600 年を記念して神宮が創設された直後の時期か, あるいはそれ以前に白子善一氏と関わりの深い別の施設(小学校か村役場か)に一旦届けられた頃に受理した相手方が「白子善一」に「氏」を付して記載し, その施設に所蔵されていたものが, のち近江神宮所蔵, そして大津市歴史博物館寄託資料となって現在にいたったものと考えられる。塚本氏も白子氏もすでに故人になられており, これ以上の探索は困難であるが, 戦前, 二人とも滋賀里集落の近所に在住されており, 崇福寺跡付近に土地を所有されていることなど共通する点も多く, 南滋賀廃寺と比較して滋賀里所在の崇福寺跡



は二人にとってきわめて身近な存在であったことなどを考慮すると、この墨書された「滋賀県教育委員会1975年報文」の「図版45の113番」の軒丸瓦は崇福寺跡採集資料と理解した方がよさそうである。

したがって、崇福寺跡からは大和川原寺出土601A種同範軒丸瓦が少なくとも2点採集され、南滋賀廃寺からはこの同範軒丸瓦は出土した可能性は否定されるか、もしくはきわめて出土した確率が低いものと整理することができる。

南滋賀廃寺は、側視形蓮華文方形軒瓦（通称サソリ瓦）や方形瓦の使用、一本造り軒丸瓦の導入などをもとに渡来系の技術を駆使した寺院として説明され、その特徴的資料を重視して大津宮とも関連づけて取り上げられることが多い。とくに川原寺系軒丸瓦使用を根拠にこの寺院と大津宮中樞部遺構群が同一中軸線で設計・計画された寺院として緊密な関係をもっていたものと評価されている。そして一部には方形瓦などを共通する点として穴太廃寺や南滋賀廃寺・園城寺前身寺院と崇福寺によって大津宮を囲むように守備する寺院と理解されているものもある。

しかし、上述したように筆者は南滋賀廃寺には大和川原寺出土601A種同範軒丸瓦は使用されていないものとみなし崇福寺に使用されていたものと理解したように、南滋賀廃寺は大津宮時代には渡来系寺院として存在していたものが、奈良時代後半から平安時代前半に至って、「飛雲文軒丸瓦」を使用するようになり公的な性格の一側面も有する寺院になったものと考えられる。最近、南滋賀廃寺の東方200～300mの畑地で採集された平安時代の緑釉陶器の底部外面に「錦寺」とヘラによって刻まれた土器が発見されたが〔大津市埋蔵文化財調査センター2012〕、この寺院はおそらく「錦寺」を名乗っていたものと推定され、渡来系氏族錦織氏の氏寺の可能性が極めて高くなった。また錦織遺跡でも「飛雲文軒丸瓦」が出土しており、錦織遺跡の遺構群にも公的施設の性格も推定され、この頃に多種多量の「飛雲文軒丸瓦」が使用された近江国庁と南滋賀廃寺や錦織遺跡の間には密接な関係が想定され、近江国庁に所属する官衙と寺院とが密接な関係であった可能性が高く、奈良時代後半から平安時代前半の時期にいたって官衙と公的な寺院の性格を有するようになったものとみられることから、筆者は滋賀郡衙と郡寺のような関係のものではなかったかと考えている。

以上のことから、大津宮遷都以前には渡来系氏族によって、穴太廃寺や南滋賀廃寺・園城寺前身寺院のほか単弁系瓦を出土する坂本八条遺跡（廃寺）も含めた現在の坂本から三井寺地区の範囲に寺院の建立や集落形成がなされ、そしてこれらの寺院や集落が比叡山東麓において一定程度環境整備された段階になって大津宮は遷都されたものと想定される。都が移された頃には、これらの渡来系寺院のほかに錦織に所在する宮を中心に北西方の滋賀里山中には崇福寺が、南東方の大津市中央三丁目付近には大津廃寺が建立された（図1）。これは大津宮を挟んで北西から南東のラインを予め意識した計画線としていたことが推定され、それぞれの陸上交通の要所に両寺院を配置されたものである。すなわち、北西方に位置する崇福寺は京都と大津を結ぶ志賀越え付近に造営され、かつ単に仏教寺院だけでなく眺望が利く要素も意識して建立された。一方、東南方の大津廃寺にはのちの東海・東山道に面していることと、その付近に港湾施設を設けて陸上・湖上交通の要衝に配置したものと想定される。

したがって、当時の対高句麗外交を中心として東北政策も含めて日本海航路などの湖上交通や陸上交通の整備が天智天皇を中心とする近江朝廷によって推進されたものと考えられる。

### ③……………大津宮とその周辺の構造

大津宮研究は所在地論を皮切りに一部は条坊制を伴う「大津京論」もみられた(図24)。まずその所在地は穴太・滋賀里・南滋賀・錦織・大津市街地・粟津などの諸説が掲げられていた。穴太・南滋賀説はいずれも白鳳期に造営され平安時代まで存続していた寺院が判明したことから、「宮」説は否定された。滋賀里説は小字「太鼓塚=太極殿」「蟻の内=荒れた内裏」などからの推定であったが、この地区には多くの後期古墳が分布し、かつ遺存状況が良好で白鳳期にこれらを破壊して宮殿遺構を構築したような事実が認められないことから否定されている。なお西方の山中には天智天皇勅願寺院の崇福寺が建立されている。錦織説は、これらのなかで唯一宮殿遺構が検出されており、「近江大津宮錦織遺跡」として国指定史跡として保存が図られている。また大津市街地説では近年、浜大津付近の発掘調査で大津宮前後の遺構や遺物が見つかっている。JR大津駅の北方では先述したように大津廃寺が確認されている。粟津説については依然として実態は不明のままである。

以上のことから、当初の大津宮研究は所在地の探索に重点が置かれたものであったが、近江大津宮錦織遺跡の発見とともに最近の研究では宮の構造論や周辺の白鳳寺院等も含めた広域的範囲の構造論へと展開しつつある。

林博通氏は「崇福寺など四寺院による大津宮防御説にともなう京域」を提唱されているが[林1978, pp.136-140, 林1984, p.141], これは西田弘氏見解の大津宮時代の水位87.5mと推定していることと、大津北郊地域の湿地帯に関する小字名を除いた範囲としていることに影響を受けた区域である(図25)[西田1966]。すなわち東限は当時の湖岸線とされる標高87.5m付近、西限は錦織遺跡から約300m西方の標高120m付近、南限は錦織遺跡から約500m南方の不動川付近、北限は錦織遺跡の北約3kmの穴太廃寺付近とされている。これらについて秋田裕毅氏は次のように指摘している[秋田1997]。西田氏が当時の水位を87.5mと推定しているのは、『石山貝塚』調査報告書[平安学園考古学クラブ1956]の貝塚表面の標高87.5mよりも高い90mラインの湖岸線が念頭にあり、時代が下がるほど湖岸線が後退することと、現在の湖岸線85m付近(84.75m)を加味し、87.5mを大津宮時代当時の湖岸としている。また不動川以北の標高87.5mから湖岸までの低地は小字名から推測すると、江戸時代以前は低湿な沼沢地的な状況であったとしているが、実際は江戸時代後半の方が悪かったとし、「西田氏の思い込み」であると指摘し、大津宮当時の琵琶湖の汀線は弥生時代中期中葉の地震によって成立した標高81.3mであるから西田氏の想定水位との差は約6m余りであるとし、「大津京の京域」は林氏によって、その存在をまったく否定されてきた不動川以南において、湖岸線が約800m東に後退することとなり、御陵町・尾花川・観音寺の地区に十分な土地を得ることができるとして、柳川以南の東西1km、南北1.9kmの京域を想定した。秋田氏の意見に対して、中西常雄氏は「十分な土地が得られることと、『京域』があったこととは必ずしも一致しない」と評し、「大津宮の全容が見えてこない今日傾聴に値する」としている[中西2001, p.175]。

このように近江の遺跡の立地条件を語るうえで欠かせないのが琵琶湖の水位の問題である。そこで当時の水位を確認する必要がある。大津市内では、大津城下層遺跡で85.5mの遺構面を確認しており、水位はそれよりも下方と推定され、また草津市域では古墳時代後期の推定汀線が約86mで

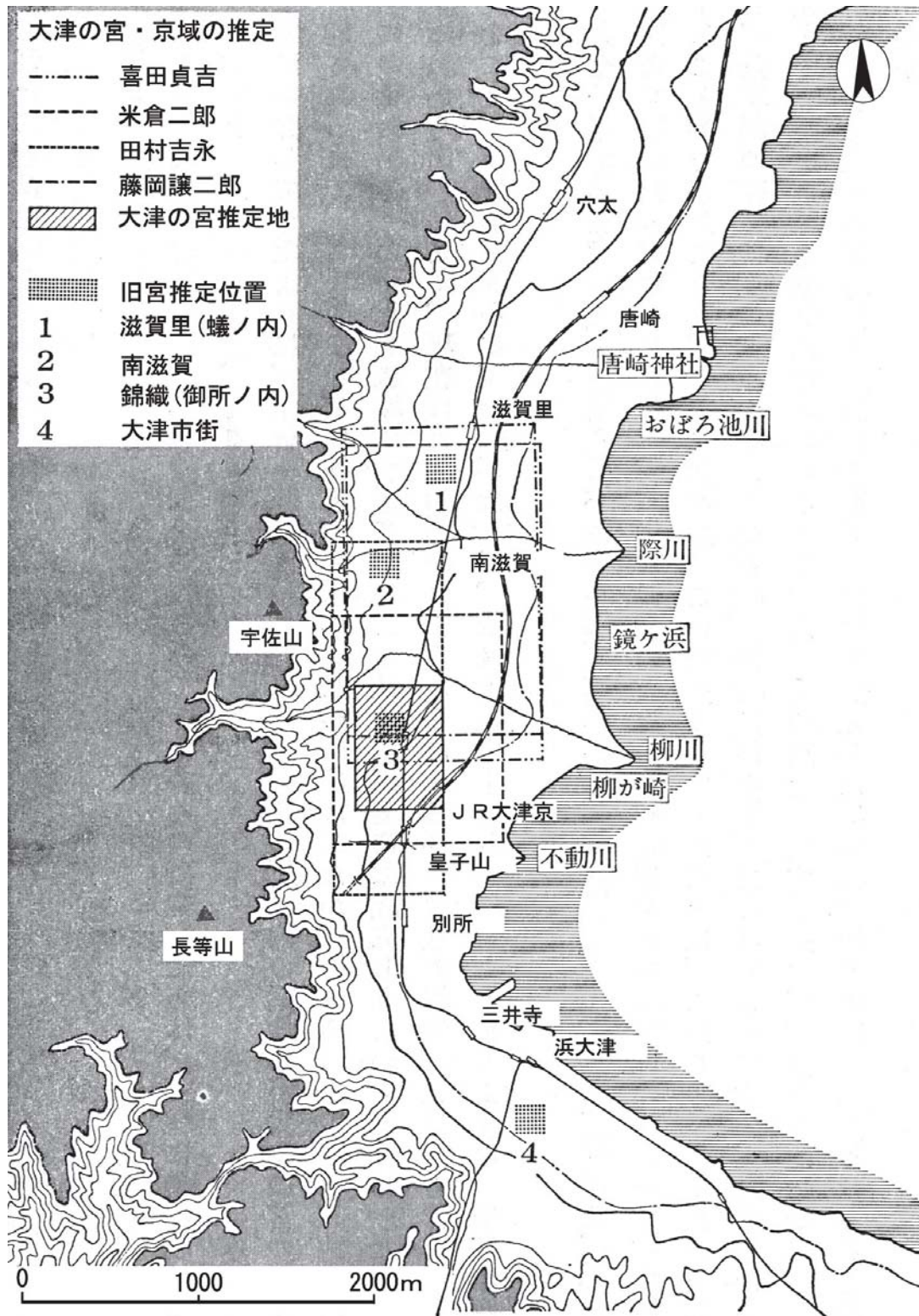


図24 大津宮所在地諸説図



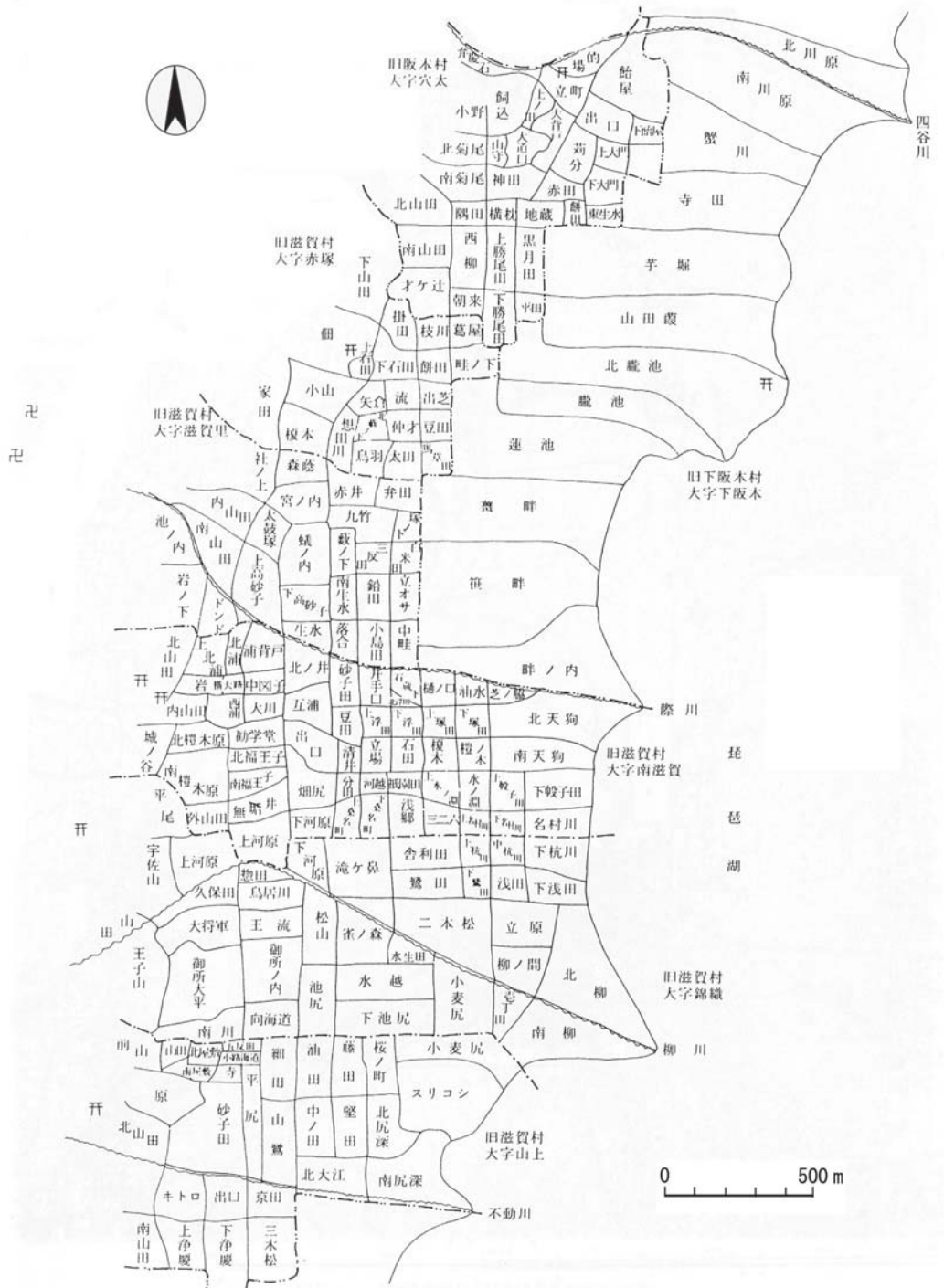


图25 比叡山東麓地域小字図

あったことだけが知られている。これを仮に7世紀以降まで続いていた水位とするならば、草津川以北の宝光寺跡・大般若寺跡・花摘寺跡・観音堂廃寺は86~90mの湖岸に立地し琵琶湖水面との差0~3m、草津川以南の笠寺廃寺は95mに立地しておりその差は9mを測ることから性格の異なる寺院とみられている。特に草津の古代寺院の建立契機は大津宮遷都頃にあり、草津川以北の四カ寺は前代の経済基盤のほとんどないところに造営されている点に特徴があり、当地の仏教信仰と防衛拠点として崇福寺と相隔てない時期に建立されたと推定されている〔藤居1986〕。

つぎに大津・草津両市の調査では当時の水位を得られていない中で、仮に現在の水位約84m（正確には84.371m）として大津宮錦織遺跡と周辺寺院の標高を比較してみると、大津宮内裏正殿103m、同南門101mを測り、その比高差17~19mを測る。次に寺院の標高は、衣川廃寺（106m）、坂本八条遺跡（107m）、穴太廃寺（103m）、崇福寺跡北尾根伽藍（240.9m）、同中尾根伽藍（241.9m）、南尾根伽藍（246.4m）、南滋賀廃寺（119m）、園城寺前身寺院（112m）、大津廃寺（90m）膳所廃寺（102m）を測る。大津廃寺はわずか6m差の低地にあたり、大津宮宮殿遺構よりも11m低い。穴太・膳所廃寺とは水位との比高17~18mで宮殿遺構とほぼ同じ高さである。衣川廃寺と坂本八条遺跡・園城寺前身寺院・南滋賀廃寺は水位との比高22~35mを測り、宮殿遺構よりも5~16m高い。崇福寺跡は琵琶湖の水位との差156.9~162.4mを測り、宮殿遺構よりも139.9~143.4m高所である。つまり、大津廃寺は最も低地に立地し、崇福寺跡は最も高所に立地し、かつ南尾根の伽藍は、北・中尾根のそれよりも4.5~5.5m高い。その他の寺院はほぼ同高かそれ以上のいわゆる高燥の地に立地する。ここで注目されるのは、大津廃寺と崇福寺であるが、先述したように大津廃寺は港湾施設との関わり、崇福寺跡は眺望が利く陸上交通の要衝に位置することを立地条件の特徴からも裏付けることができよう。ちなみに崇福寺跡の北・中尾根と南尾根の伽藍の標高差は、従来から見解されている白鳳期と平安時代の遺構の時期差とも一致する理由となりうるであろう。

さて大津廃寺が所在する浜大津付近については、足立康氏によって「黒板勝美博士が『国史の研究』に於いて夙に『国史の研究』に同宮址を『近江大津市付近』と推定されているのは実に卓見と言わねばならない」と評価され、両氏ともに「大津宮市街地説」を提唱された〔黒板1932、足立1940〕。すなわち黒板勝美『国史の研究』は1908（明治41）年に、最初に『国史の研究』全として一冊本で文会堂書店から刊行されたが、1936（昭和11）年まで改訂されるなど刊行が重ねられたのである。1908（明治41）年から1918（大正7）年の第4章公家時代の概観二、第三奈良朝廷期のところで、喜田貞吉の見解に基づいて「天智天皇の大津宮は近江滋賀郡滋賀村」としている。しかし1932（昭和7）年の『更訂国史の研究』各説上では、第3章公家時代一、第三奈良朝時代のところで喜田説を批判し、歴代天皇都名称所在表で「天智天皇の大津宮は近江大津市付近」、「弘文天皇の大津宮は近江大津市付近」としており、足立氏の引用は正確には『更訂国史の研究』各説上ということになる。

現在のJR大津駅から浜大津付近の地形は南高北低の地形でその先に琵琶湖に面して旧吾妻川が形成した扇状地が広がっている。現在の吾妻川は音羽山に源を発して東流し、一旦途中から北流したのち、東方に鋭角に屈曲して大津駅の南側を東流し、滋賀県庁付近で再び北側に屈曲して北流して打出浜付近で琵琶湖にいたっている。

この付近での考古学的調査はきわめて小数であるが、それは江戸時代の大津百町と呼ばれた旧大

津町の段階から住宅や施設が密集しすでに地下遺構は破壊され存在していないものと推測され、発掘調査が近年まで実施されていなかった。そのようななかで先述したとおり「大津廃寺の遺構と遺物」が発見されたのである。大津廃寺以外にも京極高次の大津城を探索することを主目的として調査が断続的に行われるようになり、次のような遺構と遺物が確認されている。大津城下層遺跡のことである（図26・27）。この遺跡は京阪電車浜大津駅の南西方約120mに位置し、現在の地表面から約5m地下にあたる標高約85.5m付近から幅約5m、深さ約0.6mの流路跡が見つかった〔滋賀県埋蔵文化財センター1997〕。この流路は南から北に向かって流れており、流路の肩部には部分的に板と杭による護岸設備が設けられていた。流路の中からは、大津宮時代を前後する7世紀後半頃とみられる須恵器や土師器の杯が破棄された状態で出土している。また流路東岸からは先端が焦げた木片とともに、土馬の一部が出土している。このことから雨乞い等の祭祀が行われていた可能性もある。この場所から東方約200mの地点でも大津宮の時期の柱穴3基、2間分と土器や鉄鋳石が見つかっている。前者の遺構・遺物からは官人や貴族の邸宅跡などの集落が南方の高台に向かって存在していた可能性を示し、後者からは柱穴がさらに琵琶湖に向かってのびていることなどから港湾施設の一部が予想される。

つぎに、遺構の方位の変遷について述べてみたい。古墳時代後期の6～7世紀前半の穴太から錦織までの掘立柱建物や大壁建物など遺構の方位は、北で東へ $2^{\circ}$ から $52^{\circ}$ 振っているが、これは西方の山麓や丘陵の方位に多分に影響を受けた方位となっており、角度には幅がみられるものの、 $30\sim 40^{\circ}$ 前後に集中している。大津宮時代の方位は、錦織遺跡の大津宮宮殿遺構によると北で西へ $1^{\circ}19'33''$ 振っている。南滋賀廃寺では北で西へ $1^{\circ}20'$ 、「馬日佐依二」の木簡が出土した南滋賀遺跡の集落遺跡では北で東へ $20^{\circ}41'27''$ 、南滋賀57-1地点の南北溝SD02では北で西へ $1^{\circ}20'$ 振る。この南北溝は南北45m以上、幅1.0～1.2m、深さ0.25～0.3mのU字状の素掘りの溝である。道路側溝の可能性はあるが、西側14m、東側7mの間に平行する溝遺構が検出されていないものである。穴太廃寺再建塔・金堂では北で西へ $5^{\circ}10'$ 振っている。

以上のように古墳時代後期の遺構群は北で東へ振る傾向があり、大津宮時代のそれはほぼ真北を意識した角度となっているのが特徴である。つまり前者は地形の影響を多分に受け、後者は地形的制約をまったく無視したかの如くの方位を意識している。ただし、これは宮殿遺構や仏教寺院、推定南北道路に限られたことであり、集落遺跡ではまったく異なる方位を示しているのである。

つまり整齐なる計画のもとに大津宮は遷都されたのではなく、比叡山東麓から南麓において、す



図26 大津城下層遺跡位置図



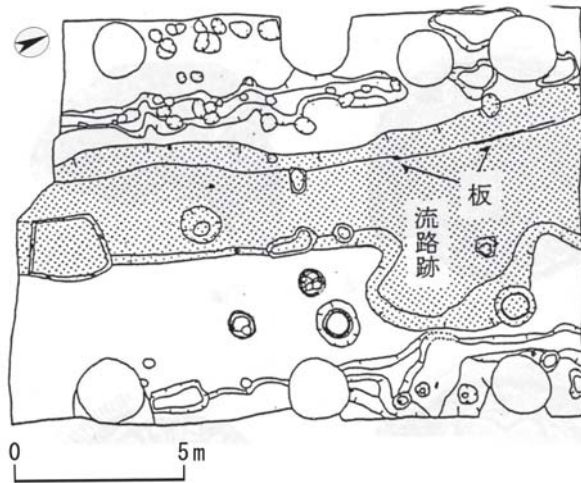


図27 大津城下層遺跡遺構図

でに古墳時代以降の渡来人によって氏寺である穴太廃寺や南滋賀廃寺が高燥の地に建立され、一般集落は西方の地勢の影響を受けた集落を形成していた。また、おそらく坂本・唐崎・皇子が丘・浜大津・栗津等に港湾施設や「市」の萌芽的施設も設営されていたものと想定される。このように建物や施設の方角が混在した様相を呈していた。これらの範囲すなわち坂本から膳所一帯にかけての区域において一定程度整備されたところに大津宮は遷都されたものと思われる。さらに「高燥の

地」の錦織地区に宮殿建物を建設し、遷都後、新たに北西方の滋賀里山中のきわめて高所には崇福寺を、東南方の低地には大津廃寺を造営し、付近に港湾施設をも設営したものと想定される。それらの大津宮関係施設を拠点としてネットワーク化させ機能を分担・分散させていたのが近江大津宮の特別な性格を示すものであったといえよう。

したがって、大津は、のちの平安京の玄関口として機能していた琵琶湖の湖上交通上の重要拠点・外港であった性格が大津宮時代にも相通じるものと理解される。宮中枢部を中心としたこれらの範囲の構造は、陸上・湖上交通の要衝である点に重心が置かれ、かつ仏教寺院や政治的な施設、貴族の邸宅などが混在した空間を示していたものと考えられる。

#### ④……………大津宮の廃絶

大津宮は672（天武天皇元）年に起こった日本古代史上最大の内乱である壬申の乱の結果、大友皇子側が大海人皇子側に敗れて廃都と化し、宮は再び飛鳥へと移った。この間わずか5年余りの短命の都であった。その廃都の様相について述べてみることにする〔吉水2011B〕。

大津宮が廃都となって約十数年を経て大津を訪れた柿本人麻呂はその荒都のようすを次のようにうたっている。

近江の荒れたる都を過ぎし時に、柿本人麻呂の作れる歌  
玉だすき 畝傍の山の 檀原の ひじりの御代ゆ 生まれましし 神のことごと つがの木の  
いや継ぎ継ぎに 天の下 しらしめししを 天にみつ 大和を置きて あおによし 奈良山を  
越え いかさまに 思ほしめせか 天ぞかる 雛にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の  
大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の神の尊の 大宮は ここと聞けども 大殿は  
ここと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる ももしきの 大宮所 みれば  
悲しも

（万葉集・巻一・三〇）

このように廃都となったのち、わずかな年月の間に大津宮の宮殿跡には春草が繁り、その所在地すら知ることができないような状況となっていた。人麻呂が荒廃した都を嘆き悲しんで詠んだ作としてあまりにも著名なものである。

また廃都直後のようすを伝える史料には『懷風藻』の序文にあり、大津宮は焼失したように記載されているが、『日本書紀』では大津宮が焼失したかどうかについて記されていない。このことについては考古学的調査で確認されている近江大津宮錦織遺跡の宮殿遺構群を検討してみると、建物の解体時期については、内裏南門の柱抜き取り穴から出土した若干の遺物から宮廃絶直後の飛鳥Ⅲ期以降で時間があまり経過しないうちに行われた可能性が高い(図28)。その他の建物も柱抜き取り穴で見られる黒っぽい灰褐色砂質土である点が内裏南門のそれと共通していることから、ほぼ同時に解体されたものと想定されるのである。

建物の解体の方法は、柱の抜き取り痕がみられるものとそれ以外の柱の抜き取り穴が認められない柱穴を仮に切り取り法で処理したもの<sup>(3)</sup>の理解すると、内裏正殿や庇付建物などの主要建物と区画施設は抜き取り・切り取りの両方が行われ、特に区別されていなかったとみなされる。ただし、主要建物の内裏正殿や庇付建物と内裏南門や南門に接続する回廊は柱の抜き取り方法よりも切り取り方法が若干多いため、切り取り方法が主として行われていたのに対して区画施設の中でも板塀のようなものだけはすべての柱材は抜き取り方法で行われていたとも考えられる。また大津宮建物の解体にあたって柱材はその他の施設の建物に転用される予定があるものについては柱自体の腐食の度合いをみて切り取り・抜き取りの方法のいずれか選択されていたため、両者の方法が入り交じったようなことが見受けられるのである。また大和川原寺においては、川原宮から川原寺へ変わるように宮の廃絶後、「宮から寺へ変わる」例も認められるが、大津宮に関しては宮から寺へ変わったような資料は現段階では明らかではない。

以上、大津宮の廃絶について、近江大津宮錦織遺跡の宮殿遺構を資料として、その時期や解体状況を中心に述べてみた。各建物の柱穴等において焼失した痕跡は一切認められていないことから現時点では『日本書紀』と一致するものであろうか。宮殿建物は解体されたのち、柱材はおそらく再び飛鳥へと移された宮の用材として運ばれ、宮殿の柱として転用されたものと想定される。

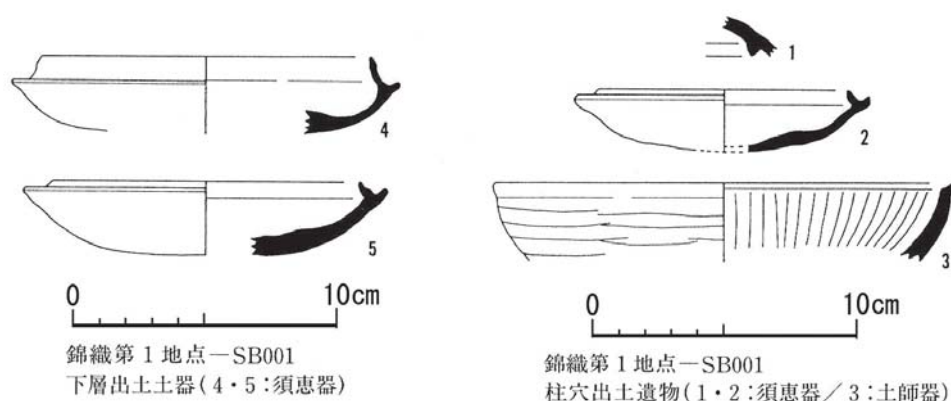


図28 内裏南門抜き取り穴出土土器

## おわりに

以上のように、本稿では先学諸氏によって蓄積されてきた大津宮研究の成果に導かれながら、そこから見出された諸問題について検討してきた。その結果、大津宮の特殊性が見えてきた。すなわち、対高句麗外交や軍事上の拠点整備を推進するために陸上・湖上交通の整備に重心が置かれ、大津宮の形が短期間のうちに整備・推進されていた点である。

大津宮遷都前夜までの比叡山東麓地域は、周知のとおり渡来系氏族の大壁建物や掘立柱建物の集落が営まれ、また各氏族による坂本八条遺跡（廃寺）・穴太廃寺や南滋賀廃寺などの仏教寺院も建立されており、周辺には萌芽的な港湾施設も存在していたものと推定される。このように遷都を受け入れる環境が一定程度整備されていた地域に大津宮は移されたのである。

そして遷都の翌年、宮（推定内裏）の北西方にあたる滋賀里の山中丘陵上に周辺寺院の中では最も眺望の利く高所に天智天皇勅願の崇福寺を新たに建立し、一方、その逆方向である東南方向に周辺寺院の中では最も低地にあたる現在の浜大津付近の琵琶湖岸に大津廃寺を建立した。つまり崇福寺跡と大津廃寺は川原寺同範軒丸瓦を共通して使用していることから、大津宮と密接な関係が想定され、前者には城郭的要素があり、後者には木津川沿いの高麗寺と「相楽館」のような関係を有する港湾施設を近隣に配置し、人と物の移動ための機動力を重視して造営されたのである。いずれも大津宮の陸上・湖上交通上の重要な拠点としての機能を果たしていたことは先述したとおりである。これらに触発されたかのように周辺氏族は穴太廃寺の再建例にみられるように再整備を行なっている。このように大津宮の内裏地区や、大津廃寺を除いた仏教寺院は比較的高燥の地に立地し、かつ正南北方位を意識した伽藍配置がみられるのに対して、木簡などを出土した南滋賀遺跡の集落跡などは低地に営まれ、かつ正南北方位を意識しない建物を構築している。おそらく内裏地区や仏教寺院、諸機能を分担した各施設は整齊に構築され、その周辺には地形に左右された方位をもつ集落などが混在した空間を呈していたものと思われる。

近江朝廷の内裏や仏教寺院・関係施設などを短期間に新設し、ハード面を充実させていくにつれて渡来系集落的景観から大津宮の陸上・湖上交通整備を重視した未集住な空間へと変遷していったものと考えた。

最後に本稿では「近江大津宮錦織遺跡」を中心としてその周辺の寺院もあわせて論じてきたが、錦織遺跡の東南方に近接する北大津遺跡出土の土器資料は在地性が強い杯などが見受けられ、これらの土器群が大津宮の中心的施設からの流入品とすると、果たして「律令的土器」となりうるのか、若干の問題も生じるところである。一方で「大津市街地説」の地点である浜大津一帯の大津城下層遺跡にみられるこの時期の土器群は、「律令的土器」とみても差し支えない程精製である。おそらく大津城下層遺跡の南方（旧流路の上流）付近に大津の宮の重要施設あるいは貴族や官人の邸宅などが存在したものと想定される。いずれにしても、しばらくは近江大津宮錦織遺跡は大津宮の一部の遺構群とみなし、その範囲は一般的に述べられることが多い穴太から三井寺地区よりも広い範囲と理解すべきであると考えている。今後の資料の増加を待ってさらに検討してみたい。



## 註

(1)——この軒丸瓦の出土量は「若干の」「小数の」という表現で紹介される論考もみられるが資料はこれだけである。しかも発掘品ではない。

(2)——図版53の瓦(143・144)には、「崇福寺丸山出」と墨書されており、塚本権一郎(塚本権右衛門氏のご子息)氏宅には同様のものが同一筆致で墨書された資料が他にも多く見受けられることから(2004年12月13日筆者確認)、これらの瓦類は一時的に塚本氏宅に所蔵さ

れていたものと推定された。

(3)——本稿では柱の抜き取り穴が見られない柱を切り取り法で処理したものと仮に理解しているものの、自然に腐朽したのも当然存在したと推定され、あえて抜き取りと区別するために用いたものである。

(4)——本稿では、両地点の発掘調査報告書が未刊のため詳細に取り上げなかった。

## 参考文献

- 秋田毅 1997『びわ湖湖底遺跡の謎』創元社  
 足立康 1940「大津宮に就いて」『建築史』2-5  
 大津市教育委員会 1982『大津市埋蔵文化財調査報告書(4) 錦織遺跡』  
 大津市埋蔵文化財調査センター2012『特別陳列 南志賀出土の篋書土器(展示解説シート)』  
 小澤毅 2003『日本古代宮都の研究』青木書店  
 金子裕之 1983「軒丸瓦製作技法に関する二・三の研究」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所  
 黒崎直 2001「近江大津宮『内裏南門』柱穴考」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会 真陽社  
 黒板勝美 1932『更訂国史の研究』  
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1975『榎木原遺跡発掘調査報告—南滋賀廃寺瓦窯—』  
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1992『錦織遺跡—近江大津宮関連遺跡』  
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1994『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅷ—付、南郷田中瓦窯跡・石山寺境内遺跡調査概要—』  
 滋賀県埋蔵文化財センター1997「大津宮期の流路跡見つかる 大津市大津城下層遺跡」『滋賀埋文ニュース』第212号  
 柴田實 1940, 1974 復刊『滋賀県史蹟調査報告 第9冊 大津京趾(上) 南滋賀の遺蹟とその遺物』名著出版  
 柴田實 1941, 1974 復刊『滋賀県史蹟調査報告 第10冊 大津京趾(下) 崇福寺趾』名著出版  
 田中久雄 2009「大津廃寺・山ノ神遺跡の出土遺物」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅢ—川原寺式軒瓦の成立と展開(1)』奈良国立文化財研究所  
 中西常雄 2001「大津宮雑感」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会 真陽社  
 仁藤敦史 1986『『大津京』の再検討』『史観』115, のち1998『古代王権と都城』所収, 吉川弘文館  
 西田弘 1966『大津市南滋賀町畑尻遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会  
 西田弘 1980「大津市指定考古資料 大津京関係遺跡出土品(近江神宮蔵)(4)」『近江文化』11 近江歴史民俗博物館建設後援会  
 林博通 1978『さざなみの都・大津京』サンライズ出版  
 林博通 1984『考古学ライブラリー27 大津京』ニューサイエンス社  
 林博通 2001『大津京跡の研究』思文閣出版  
 林部均 1998「飛鳥浄御原宮の成立—古代宮都変遷と伝飛鳥板蓋宮跡—」『日本史研究』434, のち2001『古代宮都形成過程の研究』所収 青木書店  
 林部均 2008『歴史文化ライブラリー249 よみがえる王宮 飛鳥の宮と藤原京』吉川弘文館  
 藤居朗 1986「草津の古代寺院」『滋賀史学会誌』第5号 滋賀大学史学会  
 平安学園考古学クラブ 1956『滋賀県石山貝塚研究報告書』  
 細川修平 2011「近江大津宮の研究課題」『林博通先生退任記念論集 琵琶湖と地域文化』林博通先生退任記念論集刊行会 サンライズ出版  
 吉水眞彦 2011A「近江大津宮『朝堂西第一堂』の検討」『林博通先生退任記念論集 琵琶湖と地域文化』林博通先生退任記念論集刊行会 サンライズ出版  
 吉水眞彦 2011B「近江大津宮の廃絶」『淡海文化財論叢』第3輯 淡海文化財論叢刊行会

---

挿図出典

---

図1 明治42年地形図に加筆。図2・3・4・28 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1992『錦織遺跡—近江大津宮関連遺跡』に加筆。図5 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1994『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅷ—付、南郷田中瓦窯跡・石山寺境内遺跡調査概要—』に加筆。図6 林博通1993「大津京発掘20年史」『よみがえる大津京』大津市歴史博物館に加筆。図7 財団法人滋賀県文化財保護協会1985『文化財教室シリーズ 大津京（上）』

図8 林部均2007「高市郡明日香村飛鳥京跡飛鳥京跡第155・156次調査」『奈良県遺跡調査概報 2006年』奈良県立橿原考古学研究所に加筆。図9・14 林博通2001『大津京跡の研究』思文閣出版に加筆。図10 大津市教育委員会1982『大津市埋蔵文化財調査報告書（4）錦織遺跡』に加筆。図11 財団法人栃木県文化振興事業団・栃木市教育委員会1998『北原東・西下谷田遺跡—下水道資源工場・広域清掃工場建設に伴う発掘調査（平成10年4月19日現地説明会資料）』に加筆。図12 中島広顕2000「武蔵国豊島郡衛の正倉—御殿前遺跡」『郡衛正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所。図13 黒崎直2001「近江大津宮『内裏南門』柱穴考」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会 真陽社。図15 大津市市域図に加筆。図16 田中久雄2000「大津廃寺の調査成果」『平成12年度市内遺跡発掘調査成果報告会（発表資料）』大津市埋蔵文化財調査センターに加筆。図17 田中久雄2009「大津廃寺・山ノ神遺跡の出土遺物」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅢ—川原寺式軒瓦の成立と展開（1）』奈良国立文化財研究所に加筆。図18 滋賀県教育委員会1981『史跡南滋賀町廃寺跡保存管理計画策定報告書』に加筆。図19 柴田實1940, 1974復刊『滋賀県史蹟調査報告 第9冊 大津京趾（上）南滋賀の遺蹟とその遺物』名著出版。図20・21・23 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1975『榎木原遺跡発掘調査報告—南滋賀廃寺瓦窯—』。図22 柴田實1941, 1974復刊『滋賀県史蹟調査報告 第10冊 大津京趾（下）崇福寺趾』名著出版。図24 田辺昭三1983『よみがえる湖都 大津宮時代を探る』日本放送出版協会に加筆。図25 西田弘氏作図に加筆。図26 大津市市域図に加筆。図27 滋賀県埋蔵文化財センター1997「大津宮期の流路跡見つかる 大津市大津城下層遺跡」『滋賀埋文ニュース』第212号に加筆。

（大津市教育委員会，国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（2012年9月26日受付，2013年3月26日審査終了）

---

## Issues Concerning Omi Otsu no Miya

YOSHIMIZU Masahiko

Omi Otsu no Miya of the Emperor Tenchi was a short-lived imperial capital, which was relocated from Nochi no Asuka no Okamoto no Miya in 667, and a little over 5 years later, abandoned due to the Jinshin War in 672. From among all the imperial capitals of the 7<sup>th</sup> century, the only capitals relocated to other locations than the Yamato Province were the Early Naniwa no Miya and Otsu no Miya. Archaeological research has placed Otsu no Miya on the southwestern shore of Lake Biwa, in the current district of Nishikori, Otsu City, Shiga Prefecture.

To understand the historical character of Otsu no Miya, its location and structure, the actual conditions of Hakuho Temple, and the spatial structure of the surrounding area was studied by reexamining the primary materials, mainly the ancient foundations and artifacts excavated by earlier digs, along with some newer excavated materials. As a result, several special characteristics of Otsu no Miya were found. Namely, to promote the establishment of a base for both diplomatic relations with Koguryo and military purposes, priority was given to the development of land and lake transportation, and the establishment of Otsu no Miya was promoted for only a short period of time.

Up to right before the relocation of the capital to Otsu no Miya, in the area at the eastern foot of Mt. Hiei, Chinese and Korean clan settlements consisting of large walled buildings and dug-standing pillar buildings existed along with such Buddhist temples as the Ano Temple (abandoned) and Minami-Shiga Temple (abandoned) built by these clans; it can be inferred that in the surrounding areas the early stages of port facilities existed. Otsu no Miya was relocated to such an area in which to a certain extent an environment suitable for the relocation of the capital was being developed. In the year following the relocation, Sofukuji Temple was newly built at Shigasato, lying northwest of the Imperial Palace in Nishikori; the temple had a fine view and the site was the highest among the surrounding temples; at nearly the same time, in contrast, Otsu Temple (abandoned) was built in the lowest position of all the temples, southeastward from the Miya, on the shores of Lake Biwa in the current Hamaotsu. Since the Sofukuji Temple site and the Otsu Temple (abandoned) both used round-shaped roof tiles produced from the same tile mold as used at Kawara-dera Temple, a close relation with Otsu no Miya can be considered. The Sofukuji Temple was fortified to some extent, and the Otsu Temple (abandoned) was constructed with a focus on mobility for the transport of people and goods, and its nearby port facilities

---



had a relation with Komadera Temple at Kizu River like “Sagaraka no Murotsumi” (guest house). As if inspired by such construction work, the clans in the surrounding areas carried out their own redevelopment as shown by the rebuilding of Ano Temple (abandoned). As mentioned above, the Palace area of Otsu no Miya and Buddhist temples apart from Otsu Temple (abandoned) were located on the higher and dry sites and arranged along a north and south line, whereas the settlement sites of the Minami-Shiga site, from which *mokkan* (a narrow strip of wood on which an official message is written) were excavated, were laid out on low-lying land and buildings constructed with no attention to a north/south axis. It is probable that the Palace area, Hakuho Temple, and each institution with an allocated function, were arranged in accordance with a deliberate and ordered plan, and the layout of its surrounding settlements was affected by the topography; these two different approaches coexisted in one spatial structure.

In the author’s view, the Palace of the Omi Imperial Court, temples and related facilities were newly established over a short period of time, and as the physical infrastructure was improving, the landscape of Chinese and Korean clan settlements was changing to a space with no settlements and a focus on developing transportation links for Otsu no Miya.

Key words: Omi Otsu no Miya, Sofukuji Temple site, Otsu Temple (abandoned), port facilities, important place of land and lake transportation